

【高知大学】

総合人間自然科学研究科1年生

氏名：ネトム サムバ

国籍：ブルキナファソ



子どもたちが健康に育つために

私は農学部で野菜の栽培について研究しています。あなた方は食料の不足による飢餓と栄養失調が人間の生活にとって重大な問題だということをご存知ですね。私の国がある西アフリカでは5千6百万人が食料不足で苦しんでいます。あなた方は飢餓状態になったことがないでしょう。一日のうちで一食か二食を食べることができずにお腹がすいたことがあるかもしれません。でも私の国の飢餓はそういうものではないのです。

私は1980年代にコンビアという村に生まれました。その当時私を含むたくさんの人々が一日一食しか食べることができませんでした。森へ行って木の葉をとって来てそれを煮て食べる人達もいました。この食料問題を解決する方法を見つけるのが私の夢になったのです。どうしたらこの夢を実現できるかを考え、大学は農学部を選びました。そして、2014年に大学を卒業し、農業技術者の資格を取ったのです。それから農家を指導し始めました。3年間この仕事をがんばりました。しかしこの方法では夢を実現するのは難しいことがわかってきたのです。野菜が病気や害虫にやられてだめになってしまうことがとても多いのです。それを防ぐためには農薬をたくさん使わなければなりません。農薬は野菜の中に入り込み、それを食べた人間の体の中にたまっていきます。特に子どもたちの体を蝕んでいきます。

温室栽培だと使う農薬は少しでいいのに露地栽培の何倍もの生産高になります。温室は野菜を害虫や病気から護り、砂嵐や雨を防ぎ、温度や日光を調節できるからです。皆さんの安全な野菜を生産することができるのです。ブルキナファソのような気候の厳しい国には温室はどうしても必要なものだと考えました。

日本は温室栽培の技術がとても進んでいます。それを研究して国へ帰り、コンピューターを使った野菜工場会社を作って、できた野菜を売りたいと思います。そして、同時に孤児院へも寄付したいと考えました。ブルキナファソには孤児院がたくさんあります。妊娠中や出産の時死んでしまう母親が日本の百倍以上いるからです。遺された家族は子供達の面倒を見ることができなくて孤児院へあずけてしまうのです。私の近所の家族もそうしました。

そして、今も国民の39パーセントが栄養不足の状態です。この状態をなくすために私は子供たちに少なくとも野菜を与えたいのです。そしてこれを学校や貧しい人たちにも広げていきたいと大きな夢を持って研究を続けています。

【高知大学】

教育学部4年生

氏名：王 広燕（オウ コウエン）

国籍：中国



匠の心

みなさん、商品を買う際、産地を気にしますか。私は「日本製」という表示を見ると、非常に大きな安心感を覚えます。それは私だけではなく、日本で暮らしている中で接した外国人観光客の多くも、日本と聞くと、まず足が止まります。では、それは日本に魅力を感じて、観光に来られたお客さんだけなののでしょうか。

それは違います。

実際に私が「Made in Japan」の魅力、そのパワーを実感したのは、年に1度香港で開かれるコスモプロフ・アジア美容展示会に、ある日本企業の通訳として3年連続で参加した際のことです。中国の大手企業の社長が私の所属する会社のブースに来られて、日本企業の部長に化粧品の製造依頼の話を持ちかけました。通常は、依頼する側がどんな商品を作りたいかを伝え、その後日本企業の研究員が処方を行い、試作品を作ることからスタートします。ところが、その社長から「弊社は高度な設備、優秀な科学者、さらに処方も持っています」と伝えられました。それを聞いて、私はその社長に「では、なぜうちの会社に依頼したいのですか」と質問をしました。その質問に対する返事は今も私の心に深く残っています。「Made in Japan が欲しい。いくら私たちの商品が良くても、消費者が信頼してくれない」とその社長は悲しい表情でおっしゃいました。

「そうですか」としか私は返事ができませんでした。私はとてもショックを受けました。確かに、この20年間、中国は飛躍的に成長し、世界中から注目を集めています。しかし、国産の商品に対して、中国国民の信頼は揺らいでいます。日本では、国民が誇りを持って国産の商品を買います。一方、中国では、多くの人が国産より「日本製」の商品を欲しがるのです。「日本製」と聞くと、多くの方は品質が良い、信頼できると感じます。

では、「日本製」と「中国製」、その差は何なのでしょう。

高度成長期を迎えてきた中国の社会では、スピードを求めすぎ、「匠の心」がだんだん希薄になっているのだと私は思います。「匠の心」、つまり「外部の環境に影響されず、自分がやっていることに専念する精神」、「地道な努力」、「1歩ずつ着実に進む心構え」、「立派なものを一層立派にする気持ち」、それらが現在の中国社会には足りていないのではないかと感じました。

日本での生活の中で、私が一番感心したのは、日本人の職業に対する態度です。その中でも、特に「職人」の気質に憧れます。時代が発展していく中、職人の枠が広がりましたが、その本質は変わっていません。自分がやっていること、作っているものに対して、魂を入れて、素晴らしいものが完成するまで時間を惜しまず、努力を惜しまず、技術を磨きます。もし、中国で「匠の心」を磨く人が増えれば、将来、「中国製」も国を代表する一種のブランドになるのではないかと思います。

今後は日本で学んだことを生かして、日本と中国がより一層協力して素晴らしい製品を生み出せるような仕事をしていきたいと思っています。